

2. 四万十川すみずみツーリズム連絡会の概要

会長： 連絡会のメンバーは、本当にいろいろな取り組みをしている人たちで、流域も5市町村あり、現在、34のグループが入っております。

この連絡会は、平成18年に県のリーダーシップで農家民宿さんたちに声をかけて、10軒そこそこの農家民宿と、これから始めようとする人たちの集まりからスタートしました。

最初は、研修の場として、先輩の施設の取り組みを教えていただいたり、5市町村の各施設をまわりながら、食事や提供している体験メニューを実際自分たちが体験してみるといった情報交換を、年に3回程度開催してきました。平成21年に自主的な取り組みにシフトしていこうということで、まず、会長・副会長をたて、役員会を開催しつつ、本会を開催してきました。それまでの組織では上流から西土佐までの流域でしたが、その時に旧中村市も入っていただいて、ネットワークの拡大もして、新しく立ち上げた民宿さんにも声がけして、その時点で30施設くらいに増えてきました。

その後も、それぞれの課題、今抱えている問題点を出し合うというかたちで会を進めてきたところ、皆さんの施設が、流域の奥の奥、本流から入ったところで、お客さんから、「道、わからん」「ナビも消えてしまう」といった声があるという話があり、この時、案内板が欲しいとなりました。それで、共通の案内板づくりというのが、私たちの中心課題になって少し動き出してきています。

その頃、同時に、四万十川流域が国の重要文化的景観の選定も受けました。これは、連絡会の会員の暮らしが、四万十川と一緒に暮らしてきた、自然と共に生きてきた私達の文化そのものが、この取り組んでいるグリーンツーリズムそのものではないかということ再発見したように思います。

1年前には、大正の中津川の重要文化的景観の取り組みの一環である、ひなまつり街道を研修視察させていただき、身近なところで自分達の文化を上手に自然の中に溶け込ませるように発信しているのに感心したことです。組織のそれぞれが重要文化的景観の中に暮らしている事。また、それを育て受け継いできているのも自分達であるということをお大事にしたいなと思います。

先ほどの案内板の話ですが、共通の案内板をどういうものにするかという話し合いに随分時間をかけてきています。この会の方向性、皆の思いというところを出してこない、かたちだけの共通案内板になるんじゃないかと思いました。そこで、掘り下げるために、昨年1年間かけて、ワークショップを開催し、講師の方や地域のデザイナーの方をお呼びして3回開催してきました。

そのワークショップでこの会の現状や課題、この会に期待するものは何なのかといった会員の皆さんの気持ちを引き出しつつ、統一案内板という目に見えたかたち

にもしていくようにしました。

案内板の作成には、費用が結構かかるので、高知NPO地域社会づくりファンドに申請して、2分の1の補助をいただいています。3月の始めには会員の手元に案内板がわたる予定なので、近々流域で見られることになると思います。すごく嬉しいです。私達の34施設は、毛細血管のように、枝の先っちょにそれぞれの施設があります。地図の中に落としてみた時も本当に散らばっているんです。そういう話の中から、「四万十川すみずみツーリズム連絡会」という名称も生まれてきて、名前の変更も出てきました。

それと、このワークショップの中から食と体験と、それを広報するという3つの部会も立ち上がり、ワークショップと共に会を重ねてきました。現在この流域には50以上の体験メニューがあって、食も上流から下流まで、全く違う文化をもっているんだということもわかってきたので、そういう食や体験メニューを今後整理して、広報部会ではPRしていくかたちにまとめていきたいという話になっています。そのためにも、やはり財源が必要なので、去年の11月にトヨタ財団の地域社会プログラムにも応募しております。

これからの現在の取り組み状況ですが、まず案内板を各自が立てること。あと、お客さんが来なかったら何もならないので、外から人が来ていただけるようにPRするため、広報部会も活躍しようとしています。

今後の課題としては、日本のグリーンツーリズムも、10年以上経ってきて、現在、グリーンツーリズムの転換期というお話をいただいたことがあります。私たちの取り組みもレベルアップして、質を向上させ、より集客につなげていくということがひとつあります。せっかくの四万十川というネームバリューを生かして、元気な流域のグリーンツーリズムのネットワークも生かして、さらに四万十川に来てくれる方を増やすために、まず、パンフレットやリーフレットを作っていきたいと考えています。

今年の龍馬ふるさと博にも大変期待しています。高速道路もさらに伸びていくので、そういう効果をいかに流域すみずみまで取り込むかということが私たちの課題です。

事務局の四万十川財団が、事務的な手続きをしてくださっているので、今後もそういう役目を引き続きよろしく願いしたいと思っております。

最後に、私たちそれぞれが地域のすみずみで頑張っている小さな施設の集まりですが、私たちの取り組みがその地域になくてはならない存在になっていきたいと思って頑張っていますので、是非、これからも応援とご指導をよろしくお願いいたします。

知事： どうもありがとうございました。あの看板、いいですね。黄色で。あったかい感

じですね。

会長： いろいろシミュレーションして、背景が川でも、山でも、雪でも、目立ち過ぎなくて目立つように。しかも、大体、車で来られるお客様が多いので、そういうことを意識してデザインさせていただきました。作るだけだったらすぐできるけど、作ったあとが大事やからということで、時間をかけて作らせていただきました。

知事： またデザインが統一で、一種の統一のブランドになりますもんね。

会長： そうですね。一斉に並ぶということも、何か大きなインパクトになるんじゃないかと思って、上手に生かしていきたいと思っております。

知事： 観光客の皆さんを受け入れていくにあたって、ネットワークを組んだからこそ良くなったのは、どういうことがあったでしょうか。

観光も最終的には、客商売になってくるわけですから、お客さんの注文にできるだけいつも応えられるようにしないといけない。同じ価格で、同じサービスレベルを提供しないといけない。いわゆる4定条件（定時、定量、定価格、定品質）といたりしますが、そういうものを満たしていかないといけない。

他県の知事さんと意見交換していて、こういう自然体験というものは、なかなかこの条件を満たすことが難しいので、観光商品としてPRができない、結果、広がりにくいところがあるという話を伺ったことがあるんですが、ネットワークづくりというのは、ひとつの突破する道なのかなと思いつつ、非常に興味深くお話を伺いました。

会長： ネットワークの利点は、例えば、次の民宿を仲間内で紹介することができることです。そのためには私たちも他の民宿や地域を訪ねて行って、どういう施設がよく知っておかなければ紹介できないということがあります。それがまず一番大きい点ではないかと思えます。上流から下流まであり、バラエティーに富んでいて、全く違うところがあるので、少しパッケージ化していきたいと考えています。一泊だけではなく、上流から下流までいろんなメニューも楽しんでもらえるような商品化も考えつつあります。

知事： 商品ができたら、教えてください。

ふるさと博には、自然体験といったものも非常に重視して入れていますし、食や花もテーマで入れています。高知県のすみずみまで足を伸ばしていただきたい、パ

ビリオンの先に行っていただきたいというのがひとつであるのと同時に、もうひとつは、歴史とともに、やはり花とか自然とか食というのがまさに高知県の観光の強みそのものであり、そういうところもPRしたいという思いもあってです。

おっしゃるようなパッケージができれば、素敵でしょうね。

会長： はい。食でいうと、例えば冬のお鍋ツアーとか、冬の売り込み方もひとつのテーマなので、普通の観光ではなくグリーンツーリズムの観光として、流域全体での商品開発も考えていきたいなと思っています。

知事： 現実に皆さんのところで、渡って泊まっていかれている方はいらっしゃいますか。途中でカヌー乗って行くといったこともするのでしょうか。

会長： 「かみこや」に泊まって、翌朝カヌー体験に行くからと、朝早く出発される方とかいますね。

知事： 例えば、予約が複数入って、収容人数を超えた場合は、ネットワークの皆さん同士で紹介し合うということもやっておられるんですか。

Aさん： 「森のコテージ」は定員が5名ですが、地域には「清いろの里」という集会施設を利用した10名定員の施設があり、大人数の場合はそこへ予約が入ります。そこで30人規模とか70人規模の宴会の場合に、近場で泊まりたいからというので、周りにある4軒の民宿で分宿するという事は、過去に何度もやっております。

Bさん： 私のところは3名（3軒）でやっていて、25名くらいまで泊まれます。それより多くなる時は、集会所を利用して、40名くらいを引き受ける時があります。

知事： 他に、お客さんを受け入れるうえで、例えば、食材を融通するといったことなどありますか。

会長： 近隣のところではそういうことがあるみたいですけど、上流、下流まで行くところとちょっと紹介するのには距離があります。

Cさん： うち是一日ひと組なので、連休や夏休みは何件もお断りしなきゃいけないケー

スが出てきます。その時に、夏はどこでもいっぱいですが、皆さんにお願いして、ご紹介したりしています。

知事： 昔、高知県の観光は南国土佐のイメージ、いわゆる大リゾート地として売っていたわけですね。ただ、そのあと外貨が自由化されて、リゾートに行くんだったら、ハワイやフィジーとか、日本内であったら沖縄に行くようになっていたりもしてきている。そういう中で観光の目指すべき方向、戦略的な方向というのは変えないといけない時期が来ている。やはり、自然の中で、いろんな滞在型・体験型の観光というのが高知県の目指していく道だと思うんです。ただ、滞在型・体験型観光というのは、逆にいうと小規模分散型であるがゆえに、旅行商品にするには弱点を持っているということもあって、その弱点をネットワークになることで補っておられるというところは、高知県が目指していく観光の方向性を大きく切り拓いてくれるものだと思うんです。

パッケージにして観光で売り込んでいこうとされているというお話についてですが、その売り込みをされる時の、例えば、商品づくりとか、営業活動、広報、PRというものはどうかたちで協働してやっていかれているんですか。

会長： それがやはり一番大きな課題になっています。県内のある旅行会社が、そういう商品をつくって、東京のアンテナショップなどにも置いてくださっています。

いくつかそれで集客できているところもあるかもしれないですが、まだまだ弱くて。私たち各施設では、そういう力が全く欠けていて、素晴らしい素材をもった人たちばかりなので、プロがそれを上手にコーディネートして売り出して下されば、必ず集客につながるのになというものが、越えなければならない課題だと感じています。

知事： 流域観光圏協議会というのをつくっているところがあって、例えば、四万十は四万十市全体でつくって、修学旅行の受け入れに非常に力を発揮していて、さらに修学旅行から超えたことをやっていこうと、今、議論されています。

仁淀川の流域も、この前、流域観光圏協議会を立ち上げたばかりです。仁淀川を観光資源としてこれから生かしていく、例えば、屋形船なんか流してみようという構想が出たりもしてきています。

それから、中芸も、魚梁瀬森林鉄道を観光資源として生かせないかという議論が出てきたり、実際に、旅行会社が商品にしてくれて、1000人くらいのお客さんが来られたそうです。そういう取り組みも進められたりしている。

やはりそういう広域での観光を取り扱って、例えば、旅行業免許も持っていて、

それでPRするような、そういうことが必要なんでしょうね。ですので、流域での観光を一緒に取り扱って商品化し、それをPR、営業活動をするという取り組みを来年もう一段強化しようと思っています。今、いきなり四万十川の皆さんと、ということにはならないかもしれませんが、そういう取り組みは段々強化していきます。